

大学の入学試験

—— 一つの報告と問題の展望 ——

岡 部 弥 太 郎

大学の入学試験と学生の大学入学後の状況との関係などがいろいろ調べられている。試験の性質からいってかなり特異なものをやっている国際基督教大学の場合はどうであろうか。それについて一つの報告をすることが本論文の前半をなしている。しかし大学入学試験が大きな問題となるのは、単に試験の性質だけではなく、国全体に関係をもつ諸相がからんでいる。その問題を大きく取りあつかって、今後こうすればよいという展望が与えられているかという、そういうものはないように思われる。いろいろな提案があってもすっきりするところまでいっていない。多くの提案にいかなる難点があるのかを考えながら、一つの見通しをつけて見たいのが後半の部分である。

I ICU の入学試験と、新卒入学者、1 年浪人経験入学者、2 年以上浪人経験入学者の入学後卒業に至るまでの成績の比較*

ICU の入学試験は学科試験を行っていない点で他の大学の入学試験と大いに性質を異にする。もっとも英語の試験だけはする。すなわち第 1 次の選抜は高等学校からの報告と、学問的適性検査と、英語の試験とをもってし、入学さすべき人員の 2 倍だけを取った。

第 2 次の選抜においては自然科学、社会科学、人文科学の学習能力検査（これらは学科試験ではない。各領域の論文、普通一時限に学習されるほどの量のものを提出して 90 分間よく学習させた上、論文を取り去って、別

* この調査には当時大学院学生であった古沢厚子氏をわずらわした。そして調査に要した費用は、他の資料との比較の関係もあって学生問題研究所から出してもらった。記して謝意を表する。

にその学習結果を検査する問題60題程を出し、多肢選択方式で答えさせるもの)と英語の検査と面接の結果とから最終的に入学者を決定したのである。(ICUの入学試験の性質は年度毎に多少変っている。一般競争試験によるものの他推薦制度もあり、これも年度によって変更がある。又1961年の入学試験では第1次、第2次の試験内容の主なものを逆転させており、第1次試験に英語を入れず、外国語学習能力検査を入れている等の変更がある。しかしここに述べた試験の性質はこの調査に関係をもつ入学試験の主な特徴を示しているものといっていよい。)

ICU は 1957 年に第1回の卒業生を出している。しかしこの調査では第2回、第3回の卒業生を対象とした。それは ICU が大学として1953年に発足する前1年間 Language Institute というものが出来、第1回卒業生のうちにはそれを終って1953年に入学したものと、Language Institute では学ばず1953年に入学したものとが混じっているので、条件が複雑になるから、それをとらないことにしたのである。

調査の対象は、1958年、1959年卒業者 224 名

内訳は1958年度、男子72名、女子43名、計 115 名

1959年度、男子58名、女子51名、計 109 名

である。

調査の手續としては、

1. 全対象を、高等学校卒業年度から、
 - a) 現役でまっすぐ大学に入学したもの。
 - b) 1年おくれて入学したもの。(時々これを一年の浪人経験者と称するが実際に浪人したか、他の大学に在学したかは問わない。)
 - c) 2年以上おくれて入学したもの。
 に分ける
2. 全対象について、4年間に履修した科目の成績を調べる。
 - a) この場合大学1年の間に課せられる英語の集中教育24単位については、この教育が特殊なものであり、入学当初の英語の力にも

非常な差違があるから、この成績の調査からは除外する。

- b) 従って履修単位数は、最低第1学年15単位、第2学年39単位、第3学年36単位、第4学年26単位、計116単位以上となる。
- c) 成績は A, B, C, D, E の評点に集約記録される。この評点の表わす意味は、
- A. 100 ～ 90点 その科目において要求されている程度を越えて優秀で、創造性に富む成績。
- B. 89 ～ 80点 その科目の要求にふさわしい優秀な成績。
- C. 79 ～ 70点 一応満足すべき成績。
- D. 69 ～ 60点 合格と認められる最低の成績。
- E. 59 点 以下 不合格。不注意、怠惰でどうしても合格と認められない成績。

3. 全対象について以上の成績を Point Hour Ratio に換算する。

- a) 上述評点には次のような点数が与えられている。

A=4点 B=3点 C=2点 D=1点 E=0点。

- b) Point Hour Ratio は次式によって求められる。

$$\frac{\sum \{(\text{ある科目でとった評点の点数}) \times (\text{科目の単位数})\}}{\text{履修した全部の単位数}}$$

例えば、ある学期に A を3単位、B を3単位、C を3単位、D を1単位とった場合：

$$\frac{A \times 3 + B \times 3 + C \times 3 + D \times 1}{10} = \frac{12 + 9 + 6 + 1}{10} = \frac{28}{10} = 2.8$$

すなわち Point Hour Ratio は2.80ということになる。

4. 各卒業年度クラス毎に、男子、女子における Point Hour Ratio の平均を求め、性差がないかどうかを検討する。
5. 各卒業年度毎に4つの学科（社会科学科、人文科学科、英語学科、自然科学科）における Point Hour Ratio の平均を求め、学科差がないかどうかを検討する。

6. 4, 5, の検討の結果により, 1 によって全対象を分類した3つのカテゴリー別 (現役入学, 1年浪人, 2年以上浪人) における Point Hour Ratio の平均を比較検討する。

調査の結果,

1. 上述の手続により算出された各卒業年度クラス別, 男女別, 学科別の Point Hour Ratio の平均は第1表と第2表の通りである。

第1表 1958年度クラスの Point Hour Ratio の平均

		男 子		女 子		男 女 計	
		人数, 平均, 標準偏差		人数, 平均, 標準偏差		人数, 平均, 標準偏差	
現 役	SS *	19	2.70	5	2.66	24	2.69
	H	3	3.09	10	2.99	13	3.01
	EL	2	3.00	13	2.84	15	2.86
	NS	2	2.54	7	3.26	9	3.09
	計	26	2.76 .384	35	2.94 .423	61	2.86
一 年 浪 人	SS	21	2.78	2	2.73	23	2.77
	H	5	2.79	1	2.42	6	2.72
	EL	0	—	2	2.87	2	2.87
	NS	2	2.98	1	2.97	3	2.37
	計	28	2.72 .324	6	2.76 .303	34	2.73
二 年 以 上 浪 人	SS	12	2.84	1	3.31	13	2.88
	H	3	2.72	0	—	3	2.72
	EL	0	—	0	—	0	—
	NS	3	2.97	1	2.98	4	2.98
	計	18	2.84 .342	2	3.15 .165	20	2.87
全 ク ラ ス	SS	52	2.76	8	2.76	60	2.76 .353
	H	11	2.85	11	2.94	22	2.90 .233
	EL	2	3.00	15	2.85	17	2.86 .508
	NS	7	2.58	9	3.19	16	2.92 .456
	計	72	2.76 .355	43	2.93 .407	115	2.82 .383

* SS は社会科学科
Hは人文科学科
EL は英語学科
NS は自然科学科

第2表 1959年度クラスの Point Hour Ratio の平均

		男 子		女 子		男 女 計	
		人数, 平均, 標準偏差		人数, 平均, 標準偏差		人数, 平均, 標準偏差	
現 役	SS	12	2.47	17	2.88	29	2.71
	H	6	2.62	17	2.85	23	2.79
	EL	2	2.53	8	2.92	10	2.84
	NS	3	3.27	1	3.30	4	3.27
	計	23	2.62 .391	43	2.88 .350	66	2.79
一 年 浪 人	SS	16	2.93	0	—	16	2.93
	H	3	2.58	2	2.69	5	2.62
	EL	0	—	1	3.41	1	3.41
	NS	1	2.13	2	2.79	3	2.57
	計	20	2.84 .372	5	2.87 .530	25	2.84
二 年 以 上 浪 人	SS	13	2.69	1	3.05	14	2.72
	H	0	—	2	3.20	2	3.20
	EL	0	—	0	—	0	—
	NS	2	3.29	0	—	2	3.29
	計	15	2.77 .405	3	3.15 .120	18	2.83
全 ク ラ ス	SS	41	2.72	18	2.89	59	2.77 .376
	H	9	2.61	21	2.87	30	2.79 .370
	EL	2	2.53	9	2.97	11	2.89 .371
	NS	6	3.09	3	2.69	9	3.04 .502
	計	58	2.73 .400	51	2.90 .368	109	2.81 .394

2. 各卒業年度クラス毎に性差を t 検定した結果, 共に性差が認められた。

1958年度クラス 人数 平均点 標準偏差

男子 72 2.76 .355

女子 43 2.93 .407

$t=2.35$ d.f.=113 \therefore 5%の水準で差が有意であると考えられる。

1959年度クラス 人数 平均点 標準偏差

男子 58 2.73 .400

女子 51 2.90 .368

$t=2.28$ $d.f.=107$ $\therefore 5\%$ の水準で差が有意であると考えられた。

3. 各卒業年度クラス別に、学科による平均点の差を分散分析法により検定した結果科別差はみとめられないと考えられた。

a) 1958年度クラス 人数 平均点 標準偏差

社会科学科	60	2.76	.353
人文科学科	22	2.90	.233
英語学科	17	2.86	.508
自然科学科	16	2.92	.456

$F=1.22$ ($n_1=3$, $n_2=111$) であり、この値は $F_{.95}=2.70$ ($n_1=3$, $n_2=100$) よりも小さい。従て、4つの学科の間には有意な差があるとは考えられない。

b) 1959年度クラス 人数 平均点 標準偏差

社会科学科	59	2.77	.376
人文科学科	30	2.79	.370
英語学科	11	2.89	.371
自然科学科	9	3.04	.502

$F=1.21$ ($n_1=3$, $n_2=105$) であり、この値も前と同じように有意なものではない。従って4学科の間に有意な差があるとは考えられない。

4. 以上の結果から、学業成績と浪人経験とを問題にするときには、性による成績のちがいを一応考慮に入れてみた方がよいと考えられた。

a) 1958年度クラス男子 人数 平均

現 役	26	2.76
1 年 浪 人	28	2.72
2 年以上浪人	18	2.84

これら3つのカテゴリーの平均の間に差があるが、分散分析によって検定した結果 $F=.650$ ($n_1=2$, $n_2=69$) であり、 $n_1=2$, $n_2=65$ のとき $F_{.95}=3.14$ であるから、5%の水準で有意差は

みとめられなかった。

b) 1958年度クラス女子	人数	平均
現 役	35	2.94
1 年 浪 人	6	2.76
2 年以上浪人	2	3.15

同じく分散分析法により検定した結果、 $F = .763$ ($n_1 = 2$, $n_2 = 40$) であり、 $n_1 = 2$, $n_2 = 40$ のとき $F_{.95} = 3.23$ であるから、5%の水準で有意な差はみとめられなかった。

c) 1959年度クラス男子	人数	平均
現 役	23	2.62
1 年浪人	20	2.84
2 年以上浪人	15	2.77

同じく分散分析法により検定した結果 $F = 1.661$ ($n_1 = 2$, $n_2 = 55$) であり、 $n_1 = 2$, $n_2 = 55$ のとき $F_{.95} = 3.17$ であるから、5%の水準では有意な差はみとめられなかった。

d) 1959年度クラス女子	人数	平均
現 役	43	2.88
1 年 浪 人	5	2.87
2 年以上浪人	3	3.15

同じく分散分析法により検定した結果、 $F = .726$ ($n_1 = 2$, $n_2 = 48$) であり $n_1 = 2$, $n_2 = 48$ のとき $F_{.95} = 3.19$ であるから、5%の水準をとる限り、有意な差があるとはいえなかった。

結果の概要とその解釈。以上統計的数字を挙げて詳しく述べたが、これを要約して述べると、

- 1) 成績には男女性別の平均において5%水準で有意の差が見られる。それは1958年度においても1959年度においても等しく見られる現象である。それ故に調査においては、男女を一緒にせず、別々のグループとして取扱わなければならない。

2) 成績が学科別に有意の差があるとは見られない。1958年度のクラスについても1959年度のクラスについても、5%の水準で学科別の有意の差は見られない。故に成績を学科別に調べる必要はない。年度別に、現役、1年浪人、2年以上浪人のカテゴリー別に調べればよいということになる。

3) 男女別、年度別に調べたところでは、現役で入学した者と、1年浪人を経験して入学した者と、2年以上浪人経験をして入学した者との間に5%水準では有意の差がみとめられないのである。

この最後の結果は重要である。これはわれらが学生問題研究所で行った代表的な国立大学の特定年度の入学者について見たのとは対照的である。すなわちその国立大学の場合を概括的に述べると、①現役入学者の入学試験成績が、浪人経験者のそれよりも低かった場合でも、専門課程では同等の成績になる。②現役入学者の入学試験成績が、浪人経験者のそれとほぼ同じであった場合には、教養課程の成績も専門課程の成績も新人の方が浪人よりもよくなる。③現役入学者の入学試験成績が浪人経験者のそれよりもよい場合には教養課程の成績も専門課程の成績も新人の方が浪人よりも低くなることは少ない、というのである。これは専門課程27学科について調べ得たことの概括であるが、さらにこれを大ざっぱに述べれば、浪人経験者は現役入学者よりも成績が劣るにいたる傾向があるということになる。

それならば、なぜ国立大学の代表的なものにおいては浪人経験者が現役入学者よりも成績が劣るにいたり、ICUにおいては浪人経験入学者も現役入学者より成績が劣るにいたらないのか。その解釈は主として、入学試験の性質に求められるのではないかとと思われる。ICUの入学試験の性質は、この稿のはじめにおいて述べた通りであって、その特色は英語を除いて学科試験を行わないことである。学問的適性検査をはじめ各科の学習能力検査は、いずれも受験者の今まで学び得たところをもととして、現実の能力を働かせ、その能力を検査することになっている。大学入学の準備

に一生懸命蓄積した知識の量の検査とは違うのである。代表的国立大学の場合は多くの学科の試験を施し、その成績を重んじている。進学適性検査も行われた年度であるが、その方は第1次試験のいわゆる足切りに使われただけであって、ほとんど重きをなしていない。学科試験を行いこれを重んずる場合にも問題の出し方によっては、現実には頭の働く能力の検査をし得るはずではあるが、この場合はそうでなかったと見るべきであろう。浪人一年を要するとはその国立大学に入学するためには常識と考えられているというのであるが、やはり学科試験はつけ焼双的、あとではげるメッキの性質をまぬかれ得なかったものと考えられるのである。以上入学試験の性質が重要なものと思われるが、もう一つには高等学校からの成績その他の報告を読み、これを入学者選抜に織り込むか否かも関係を持つものと思われる。報告された成績だけについて見ると、これを上手に読みとることは、大学入学後の成績を予言するのに重要な1資料となることが既に幾多の調査によって明らかになっている。学校差があって比較出来ないとし、これを高等学校から徴しながら読まないのは宝の持ちぐされともいうべきであろう。ICU はこれを用い、比較にもって来た国立大学はこれを用いないのである。

II わが国の大学入学試験改善策の展望

大学の入学者選抜に関しては、わが国では学科試験が、もっとも重要な位置を占めている。全く客観的に公平に、少しも情実などというものは交えないでということが規準である。学科試験をこの規準で行うことは結構であるが、それに関連して、案外手拔かりがあるのではなかろうか。その中でもっとも重要なことは、高等学校から報告される学科成績をうまく読みとり、これを重要な資料として用いることをしないということである。アメリカの大学入学者選抜において、もっとも重要視されるのは高等学校から報告される成績である。もちろん学校差があるから、その点は考えている。College Entrance Examination Board の行う学科試験の成績は、

いろいろな学校差のチェックの意味をもっている。またある大学においては、その大学にかつて学生を送ったことのある高等学校については、そこから報告される成績にそれぞれ重味をつけて、合理的に比較し得るものになっているところもある。わが国ではどうか、学校差の故に重要な大学でこれは用いられていないのであるが、個々の高校について見れば、高校の成績と大学での成績とは、入学試験の成績と大学での成績とよりも、やはり高い関係をもっているのである。さきにあげた代表的国立大学の場合、入学者を比較的多く出している H 高等学校について見ると、現役入学者41名で、高校成績と入試成績との相関係数は 0.474，高校成績と教養成績との相関係数は 0.571，高校成績と専門成績との相関係数は 0.509 であった。一般に入学試験と教養成績との相関は 0.477，入学試験と専門成績との相関は 0.402 であったから、高校の成績の方が入学試験よりも将来の成績との関係が高いのである。今は H 高校をとって見たのであるが、入学者の人数のこれにつづくもの16をとり、合せて17高校について見ると、高校の成績と大学の教養の成績との相関が 0.45 以上になっているものは、現役で10校、浪人で7校である。また高校の成績と大学専門の成績との相関が 0.50 以上のものは現役で6校、浪人では1校となっている。傾向として言い得ることは、高校の成績は現役の場合だと大学入学後の成績をある程度予診している高校が多く、浪人の場合はこの傾向が弱いということで、どの高校についても新卒者ならば大学はその高校での成績を入学者選抜の資料にすることは可能であり有用であるということである。かような事実が見出されているにもかかわらず、わが国では高校の成績を合理的に処理することが発達していない。

この合理的な処理法としては、エール大学などで行われているような、1人でも学生をその大学に送ったことのある高校については、その学生について報告された高校の点数と、その学生が大学においてあげた成績との関係から、報告された点数にウェイトを算出してこれをかければよいのである。こう言うとそれは高校に等級をつけることになるので反対だという

人があるが、それは実は誤解である。ウェイトはレベルの低い高校からの点数に重いものがかけられることもあり、レベルの高い高校からの点数に軽いウェイトしかかけられない場合もあり得る。大学が異れば高校の点数にかけられるウェイトも異り得る。そのウェイトは高校がいかなる生徒にいかなる点数をつけるか、その卒業生のいかなるものがどこの大学に進むか、そこでどんな成績をあげるかによって決まるものであって、それだけでは決して高校に格差をつけることにはならないのである。日本で学校差を考える時にはいつもすぐ学校の格差を考えることになり勝ちであるが、その誤解をとく必要がある。

もし高等学校の成績を合理的に処理して、これを入学者選抜の資料として用いることになれば、高等学校側はぐらぐらと方針の変るいい加減な点数はつけられなくなる。出来るだけ確かな点数を一貫した方針で毎年つけなくてはならなくなるので、それだけまた高等学校の点数が信頼度と妥当性とを増すことにもなるのである。

さて高等学校の成績が、重要な資料として用いられるということになれば、これをすてて顧みなかった時とちがって、何も沢山の学科についてあまり妥当でもない入学試験を行う必要はなくなって来る。現にアメリカの College Entrance Examination Board の行う試験のように、15科目程の試験の用意されたものの中から、任意に3科目までを限って受験させるか、あるいは3科目の中に特定の学科を指定して、それは必ず受けさせるというようにするので充分である。

この College Entrance Examination Board については、わが国が謙虚に学ばなければならないものが沢山あるように思われる。これは1900年にはじまったものであるから、60余年にわたる長い経験の間に発達したすばらしい組織をもち、大学にも受験者にも高等学校にも試験の内容について、又受験者の旅行や宿泊に要する費用を大きく節約させる上にも大変役立って来ている。そういう風に役立ちながら、この組織は何の強制をも各大学に向っておしつけるところがない。各大学はその自主性を堅持しながら

ら、College Entrance Examination Board に協力することも出来、その行う試験の結果は自由に自主的に利用することが出来るのである。昭和24年からわが国で行われた進学適性検査は、それをこの College Entrance Examination から範をとったものであったが、ごく大切な点においてこれに学ぶことをしなかった。それは大学側のこれを用いる仕方に、裏面の実状はとにかくとして、自主性を認めなかったことである。それ故に大学受験者は、たとえ裏面の実状では進学適性検査結果にほとんど重きがおかれなかったとしても、必ずこれを受験しなければならないことになって、たちまちわが国では米国における受験者数よりもはるかに多い人数が受験するようになったのである。もちろん進学適性検査のはじまりは、米軍の占領時代であり、教育監督当局の強い干渉に圧迫されたところがあり、止むを得なかった点もあるが、平和条約成立の後には速かに大学に自主性を持たせるようにし、かつその組織や実施法を建設的に改善すべきであった。しかるに実際はこれを空しく廃止するに至ったのである。廃止と言えそうではないとの抗議も出ようが、実際は廃止である。検査を作ってくれるところもなく、全国的にこれを実施する組織もなくなったのである。大学は自主性を回復したかのごとく考えられるかも知れないが、積極的にこれを用いようとしても組織的なものはなく、強いて用いようとするれば個々の大学が非能率的に自ら不完全なものを作らなければならないようになってしまったのである。

私は College Entrance Examination Board に学ぶべきものが多くあると考えて、これを紹介したこともある。^{*} その中に1957年10月現在のメンバー大学数が205、メンバーたる協会数が34とし置いてたが、1961年に送られて来た印刷物によると、359大学と、76高等学校と38の協会がメンバーとなって Board を構成しているとある。高等学校をメンバーに入れたのは1959年からで、最初に50校を選んでメンバーとしたが、これは3年を期限として順次交代するようにし、多くの高等学校にメンバー

^{*} 大学基準協会編：外国における大学教育，1958年，P.292

として参加する機会を与えようとしているのである。開設受験場の数も非常にふえて来た。第 52 年度に開設された受験場はアメリカ国内において 428 ヶ所、外国で 23 ヶ所であったが、第 61 年度には、アメリカ国内 1400 ヶ所、40 の外国で 129 ヶ所で検査が受けられるようになっている。

College Board の性質とその行う試験のことを最近の印刷物によって紹介すると次の如くである。

「College Entrance Examination Board は 1900 年に高等学校と大学の指導者の協力によって設立された。彼等は高等学校から大学へと学生が進んでいくことを容易にするための指示や協調や調査をそなえる協会の必要を認めたのである。

「過去 61 年間に Board のメンバーもその仕事もアメリカ教育の成長と拡大に歩調を合せて成長し発達して来た。College Board が年間に行う諸会合や協議会は、大学入学及びそれに関連する諸問題討議の主な広場となった。加うるに、Board の活動は、テストや試験をする広般なプログラムを継続し発展させること、測定やテストや心理学の諸分野における多数の研究計画を監督し後援すること、College Scholarship Service という学生の経済的援助に関する諸資料の中心機関を維持すること、諸情報やそれを解釈して指導に資する材料を発行すること、などをしている。」

「多年 College Board はその高等学校生徒に対して行う大学の入学試験やガイダンスのための試験でもっともよく知られているであろう。これらの試験は大学への入学許可という複雑な過程の一つの重要な部分となって来た；しかしそれらは単に一部分たるだけである。

「多くの学生がよく知っている College Board のテストは 3 時間を要する学問的適性検査 (SAT) である。SAT は客観的 (多肢選択) テストで低い方は 200 点から高い方は 800 点にわたる標準偏差にもとづく尺度で採点される。この尺度はいつどこで行われる版についても同じであるから、大学の入学担当者や高等学校のカウンセラーに、メイン州で行われたものであろうとカリフォルニア州で行われたものであろうと共通の尺度で

測った能力の測定値を提供してくれる。このテストの目標であり、研究がそれを支持しているところのものは、各志願者の学問的見込みについて妥当なそして恒常的な意味を有する点数を出すということであり、彼がそのテストを12月に受けようが5月に受けようが、僻地の高等学校から来ようが、大きな都会の高等学校から来ようがそれらにかかわりない点数を出すことである。

「入学志願者について、これに加えられるべき証拠資料は、Boardによって行われ、SATにつづいて午後に与えられる3つの学科試験から来る。志願者は1つ乃至3つの学科試験をとり得る。これらの学科試験はSATと同じく200点から800点までの尺度で採点される1時間の客観的な試験である。現在Boardは次の15科目について学科試験を供えている：社会科、中級数学、上級数学、フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、ラティン語、ギリシャ語、ヘブライ語、ロシア語、生物学、化学、物理学、および英作文である。ギリシャ語とイタリア語をとる志願者と、フランス語、ドイツ語、イタリア語、およびスペイン語の耳で聞きとる理解のテストを望む志願者とは特別なとりきめをする。

「1960年の12月および1961年1月の試験には、Boardは新たに1時間の作文問題を出した。ある題目を課して書かせるこれら論文は、志願者の指定する大学へ、採点をせずにそのまま送られる。メンバー大学の中約65大学が1961年に入学を許可すべき志願者にかように論文を出すことを要求し、約50大学はかような論文を出すことをすすめた。1961年～1962年には、12月、1月、3月に課題を出して論文を書かせることにする。」（試験は1年に6回行われる。12月、1月、2月、3月、5月、8月である。）

もっとも役に立つ高等学校からの報告を用いず、骨を折って幾つもの試験問題を出し、その採点にエネルギーを費やす。これをどこの大学でもそれぞれやっているのである。学問的エネルギーの非常な浪費ではないか。

それと受験者側の金銭的浪費も考えなければならない。九州から四国か

らあるいは北海道から、もっとも大学の多い東京に出て来て入学試験を受ける。代表的国立大学ただ一つを受験するとしても、少なくとも 10 日間は東京に滞在しなければならないであろう。旅費と滞在費とは相当なものである。ICU では豊かに奨学資金を設けて、能力がありながらただ経済的な理由だけでこの大学に学べないという者のないことをひょうぼうする。しかし、かような奨学資金を受けて勉学し得る幸運を勝ち得る前に、まずかなりの額にのぼる旅費と滞在費とをかけなければならない。貧乏国たることを自認している日本で、この浪費を節約することは少しも考えられていない。アメリカで College Board の試験が国内 1400 ヶ所、外国 129 ヶ所で試験を受けられ、国内においては 75 マイル以上を旅行しないですむようにという原則により、朝早く車で出れば試験場には 9 時までに着くことが出来、午前中 3 時間の SAT を受け、午後は 3 つの学科試験を受け終って、5 時には家路につくことが出来るというのと対照してもらいたい。わが国の現状は 1 大学が一念発起しただけでは治しがたいものである。どうしても賢明な組織的構想を要するであろう。

現在の欠陥の大きなもの若干については述べ終ったから、次にわが国においてはどんなステップをとって改善して行くべきか大綱を述べて見たい。

1. まず大学側の代表者と高等学校側の代表者とが、大学入学の問題について話し合いをはじめべきである。
2. 大学側はよい大学、貧弱な大学という 1 系列でなくそれぞれ特徴を明らかにすべきである。
3. 高等学校側は、大学側と協力して、どのような学生がどの大学の何学部の何学科に向くのかを、出来るだけ明らかにすべきである。細分化をすることが困難な理由があればどこまで分化して考えられるのかを明らかにすべきである。
4. 高等学校側は生徒の成績については、妥当にして信頼性のある点数をつける努力をすべきであり、人格については十分なゆきとどいた記述が

出来るようにし、これを大学側に示し得なければならない。

5. 大学側は常置の **Admission Board** を必要とするであろう。志願者からは早くから願書と資料とを受けつけて、資料の合理的処理や、面接の出来るものについては面接をする必要がある。

6. **College Entrance Examination Board** の機構機能は大学側と高校側と協力して検討し、順次日本の今もっとも必要とするものから実現して行かなければならない。

7. 大学の自主性は尊ぶべきであるが、その自主性とは他の迷惑を顧みないという性質のものでなく、自己の必要とするものを充分に利用し得る自主性でなくてはならない。

8. 日本育英会の特別奨学金の予約制度はわが国に出来た非常によい制度である。これをうまく生かして行くように大学入学に関する新機構はインテグレートされなければならない。

9. 大学入学に要する費用は正当な額に止めるようにすべきである。受験料を多額にとり入れることによって大学の経営の資にしようというようなことは恥すべきことと考えなければならない。

10. 以上のステップをふむことによって、浪人を減少させることが出来ると思うが、浪人を減少させることは、急激に浪人に不利になるような方策を取ってなすべきではない。

(本学教授)

On College Entrance Examination

(English Résumé)

Yataro Okabe

This article consists of two parts. The first part is a report on a research concerning about the relative success on the academic performance at ICU among those students who were admitted directly from high schools to ICU, and those admitted one year after their graduation from high schools, and those admitted two or more years after their graduation from high schools.

The study was done with 115 graduates of the year of 1958 and 109 graduates of the year of 1959. No significant difference was found among the average grades of the three groups of both years. This result is rather different from ones found in other colleges.

Why this could occur in ICU? The author ascribes this to the differences in the nature of entrance examination employed. While Achievement Tests are heavily used in other colleges, no such test is administered in ICU. Instead, her entrance examination is composed of a Scholastic Aptitude Test and Learning Ability Tests. Achievement Tests tend to examine the amount of knowledge the students collected, and the measures of the amount of knowledge have little power of predicting their future success. The Scholastic Aptitude Test and Learning Ability Tests, on the other hand, measure the abilities functioning. Therefore, in college where Achievement Tests are mainly used, it is quite conceivable that the grades of students who entered to the colleges one or more years after their graduation will be dropt in later years.

The second part of this paper tries to make some suggestions on the general policies for improving the method of college entrance examination in Japan. Nowadays, practically no datum other than the results of entrance examination provided by each college is taken into account for student admission. Even leading colleges very often

neglect to examine the high school records of applicants. Furthermore, there is no systematic coordination between colleges, as to the examination. There are considerable waste of energy in the side of colleges and also the waste of energy, time and money in the side of students. We are strongly urged to reform this unfortunate situation. In this respect the system of College Entrance Examination Board in U.S.A. should be studied and practiced in Japan. Systematic coordination among colleges and high schools and autonomy of each college should be equally emphasized.